

## 一つになるう

2009.5.19(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

### 引用聖句

#### エペソ人への手紙 1章15節から19節

こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

#### エペソ人への手紙 3章14節から21節

こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

#### エペソ人への手紙 4章1節から4節

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

#### ピリピ人への手紙 3章8節から12節

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

今読んでくださった箇所は、パウロの証しであり、またパウロの祈りの生活の告白のようなものではないかと思います。パウロは、はっきり「キリストには代えられません」と。

イエス様はパウロにとってすべてのすべてとなられました。それだからこそ、彼は迫害されました。憎まれました。誤解されてしまいました。彼はある時、次のように告白しました。

コリント人への手紙・第二 11章24節から28節

ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともありま  
す。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともあり  
ました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

「日々」とは、毎日のことです。

未信者から誤解されることは無理もないことです。しかし、既にイエス様の救いにあずかった人々がパウロの悩みの種になることとは、考えられない苦しみです。それにしてもこのパウロは、

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

と。

パウロは、すべてを長い目で見ることができていました。けれど今話しましたように、未信者よりも信者がパウロの重荷でした。なかなか主だけを見ようとしなかったからなの

です。目に見える現実によって束縛されてしまったからです。

最近、「共なる生活の大切さ」について、「一緒になろう」というテーマで考えました。今読みましたエペソ書4章1節からのみことばは、本当にパウロの心の表われではないかと思うのです。

エペソ人への手紙 4章1節から3節

**さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。**

「主の囚人である私は…」彼は自由人ではなかったのです。「主の虜」になったのです。パウロはよく「イエス・キリストの奴隷であるパウロ」と言いました。イエス様に仕えることは最高の幸せであり、信者の特権です。「謙遜と柔和の限りを尽くし…」。そうしないとあなたがたは用いられません。まわりの人々も導かれません。あなたがたの信者としての生活も、的外れとなります。

二十何年前でしょうか。ある所で集会があったのです。特別な集会だったようです。なぜなら、集まった各々が持っている悩みや苦しみ、信仰の問題をみな、話し合うことができたからです。(正直に。)その時、みな本当に一つである交わりを感じ、経験したので、うれしくなりました。これこそ「信者たちのありかたである」と思ったからです。各々の悩みが集会の悩みとならなければいけないはずです。

パウロは何度も書きました。一つの肢体が、即ち一人の信者が苦しめば、他の肢体、即ち他の信者たちもともに苦しむと聖書は記しています。もしそうでなければ、根本的な誤りがどこかにあるのではないかなんと言わなければなりません。もし、各々が自分一人で苦しんでいるなら、その人は霊的な成長ができないばかりか、そうすることによって他の信者みんなに影響が及びます。自分の悩みはみんなの悩みであり、自分の喜びは他の兄弟姉妹すべての喜びでなければなりません。あなたは誰にも言わないで、一人苦しんでいることがあるのでしょうか。エペソ書3章21節を読みます。

エペソ人への手紙 3章21節

**教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。**

とあります。

私たちは、教会により、即ち私たち信者の群れによって、「栄光が主イエス様に帰せられますように」という願いを持っているのでしょうか。集会へ来るのにどのような目的を持って来ているのでしょうか。何かおしゃべりをするために、またはありきたりの交わりを求めて来ているのでしょうか。それともイエス様に御栄えを帰し、ともに主のご栄光を拝するために集会に来るのでしょうか。そのうちのどれでしょう。

イエス様が私たちの信仰生活を一步一步導き、引き上げてくださるのではないかと思うのです。私の場合は、考えてみると三段階に分けられます。

救われていない時、つまり「救いの確信」を持っていなかった時でも、毎日聖書を読んだり、毎日祈ったりしました。親はイエス様を信じ、愛した人たちだったからです。もちろん救いの確信を持っていなかったし、いわゆる他の人たちとともに、自分たちは「罪人である」と告白し合っていました。決して「私」そのものは罪人であると、一人主の前に立って自分の罪を認め、悔い改めませんでした。あの人も罪人、この人も罪人と、人の中に自分の罪をごまかしていました。

けれど、それから主が私の心の目を開いてくださいました。心の目が開かれると、自分の罪ばかりしか目に入りません。それで私は絶望し、今度は自殺しようと思いました。ですが、幸いにも私の恐るべき罪を十字架の上でイエス様が負い給い、もう既に解決されているということも知るようになりました。そしてその翌日、私は救われました。イエス様の恵みを経験しました。救いの喜びを覚えました。その日、この喜びをすぐ他の人に証ししました。私はそれまで「罪人である」ということが分かっていたのですが、罪を赦され救われた時、それを公にし、「イエス様が救い主である」というこの大きな喜びを言い表わすことができたのでした。主は私にとって、日増しに偉大なお方になられたのです。そして、エペソ書1章3節から15節までが、私の身に起こったことであることを知った時、私はこのエペソ書の箇所「私たち」というところを、自分勝手に消して、「私」と書き直しました。実に驚くべき幸いな救いでした。「私のため」でした。

それからの八年間、私は救われ、更に清められるこの喜びが私のすべてとなりました。けれど何十年か後に、このエペソ書1章3節からのみことばがなぜ、「私たち」と書いてあり、「私」と書いてないのか、その意味がようやく分かりました。私たち兄弟姉妹が一つになり、イエス様のご臨在を現わし、証しするために、私たち信者が一つになっていることが、主にとってどんなに大切なことであるかが分かったのです。

昔、那珂湊の時代のことです。（今日はN姉妹も来ていますけれど、彼女もAさんを覚えていると思うのです。）あのA姉妹はある時言ったのです。「私にとってエペソ書はすべてになった。信者の群れは、またからだなる教会は、イエス様にとってすべてのすべてであるから私も大切にしたい」と語ったのです。

各々の信者が他の信者とともにする生活の必要性と大切さについて、パウロは手紙の中で何度も何度もいろいろなことを書いたのです。「まことの教会」即ち「救われた兄弟姉妹の群れ」は、霊的成長の場所、証しの場所、戦いの場所、満たされる場所であるべきです。

先週私たちは、エペソ書3章、4章から、いやされた足なえのたとえを通して、いやされた足なえは主を知り、主のもとに来て救われた時、自分は知らなかったけれど、自然に教会、即ち「からだなる教会である」救われた兄弟姉妹の群れに加えられていたことを見、経験しました。なぜでしょうか。主の所に行ったということは、主と一つになったことを意味し、イエス様をかしらとする肢体に加えられたことを意味します。かしらと肢体は分けることはできません。かしらと肢体とは一つです。ですから、いわゆる教会の見かたが問題でなく、「イエス様ご自身を知ること」が大切となってきます。もし、これを心の深くに見出すことができず、また知ることができなければ、前へ進むことができないのではないのでしょうか。

新約聖書を読むと、初代教会は、この世の制度から全く離れ、組織や規則に縛られていませんでした。御霊だけが導き手でした。もし、この「御霊の統制と導き」がなければ、人の作った組織や規則が必要となります。独立教会と言いますが、この独立という意味は、自分勝手な思うがままの生き方をすることの自由をもっているという独立ではなく、御霊が、「御霊だけが支配できる」ための独立を意味しているのです。

「まことのからだなる教会」の使命は、誰か他の人が私たちの群れに入ってくるなら、私たちは一つの教えを信じ込んだ人々というよりも、私たちの内に現実にイエス様をご臨在しておられることを感じさせる、そのような「生きた群れ」となることです。

主の恵みによって救われた者は、「かしら」を「イエス様」とする肢体です。そして、イエス様はこの肢体を通して、ご自身の栄光を現わそうとしておられます。否むしろイエス様は私たち信者を通してだけしか、ご自身を現わすことがおできになりません。私たちは、主の御栄えを現わす使命を負っているのです。

私たちが、主のささやかな御声を聞き、みこころを心に留めることができますように。そのとき初めて、私たちの群れ、主のからだなる教会が霊的成長、実り多き証し、ひたすらなる祈りの戦い、また想像に余る満たしの場所となることができると確信しているものです。

各々の信者が、他の信者とともにする生活の必要性和大切さを新しく認識しなければならないのではないのでしょうか。私たちは主の満たしを自分一人で経験することはできないのです。どうしてもお互いに経験しなければなりません。したがって、信者が一緒になってする生活は非常に大切であり、非常に尊い価値あるものと言わなければならないのではないのでしょうか。この「救われた者たちの交わり」は、理論ではなく、各々が経験すべきものであり、また経験し得るものです。

パウロは、それをエペソ書で述べています。パウロの生涯について考えると、イエス様はすごい！としか言えないのではないのでしょうか。パウロはなぜユダヤ教から離れたので

しょうか。パウロは、聖書の教えを耳にし、聖書を読み、学び、そしてユダヤ教と比べ、聖書の教えをより良い宗教として選んだのでしょうか。決してそうではありません。パウロがイエス様とともに受けた「新しいいのち」そのものが、自然にパウロをユダヤ教から脱皮させたのでした。

パウロには理論は一つもありませんでした。経験があるのみです。パウロは「死といのち」を知っていました。なぜならパウロ自身、死に勝つよみがえりの力を自分のものとして経験していたからです。パウロはまた、主のご支配を理論的ではなく実際に知っていました。それはパウロが実際にイエス様を主として、支配なさるお方として認め、おのれを主の奴隷として生活したそのことを見ると明らかです

エペソ人への手紙 4章1節

**さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。**

エペソ人への手紙 3章1節

**こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。**

とあります。

パウロはローマの暴君ネロという皇帝によって囚われたとき、自分はネロに囚われた囚人であるとは言わなかったのです。パウロは心からなる喜びをもって、私は主イエス様に囚われた。「私はイエス様の囚人である」と証しました。

これと同じようにパウロは、主のからだなる教会に対しても理論的に学んだのではなく、体験的に教えられたのでした。パウロはかつてサウロと呼ばれていました。サウロという名前の意味は、「祈りの答え」です。「聞き届けられた者」です。後に名前を変えました。「パウロ」になったのです。「たいした者ではない」「小さな者」という意味です。

彼はかつてサウロと呼ばれていた時、主によって救われた人々を迫害しようと息を弾ませ、ダマスコの道を急いでいました。パウロはその時イエス様を迫害しようとはもちろん考えていなかったのです。イエス様はもう既に地上におられなかったからです。その時、主はパウロに現われ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」とおっしゃいました。「なぜ信者を迫害するのか」とはおっしゃらなかったのです。「なぜわたしを迫害するのか」と。

この時パウロは、高く天に座し給う主イエス様と、地上の信じる者たちとは全く一つのものであることを薄々ながら感じ取ったことに違いありません。それからというものパウロは、自分は何かあるものの一部分に過ぎない。即ち「イエス様のからだなる教会の一部に過ぎない」ということを徐々に知ることになりました。

パウロは、最初はやはり少ししか主を知らなかったのです。けれど、少しずつイエス様

を知り、またイエス様を知ろうと願った時、もっと主を知るためには、他の救われた兄弟姉妹とともに生活しなければならないということも知るに至りました。

パウロはダマスコの道すがら主に出会って後、パウロのところに普通の信者である一人の兄弟アナニヤが来て、「兄弟パウロよ。主イエスが私をあなたのところにお遣わしになりました」と言いました。パウロは、回心したその第一歩から、一人の兄弟と他の信者と関わり合いをもったわけです。ただ一人では決して前に進むことができなかったのです。

私たちの今までの信仰生活を静かに振り返って考えるなら、どんなに多くのことがら他の兄弟姉妹に負っているかがよく分かります。また逆に一人で何かをしようとして失敗に終わったことも多くあったのではないのでしょうか。

パウロは兄弟に向かって、「あなたは何者ですか。私はあなたと関係があるのですか。私は自分一人で主を知ったのです」と言わなかったのです。パウロはイエス様に直接会いましたが、あのアナニヤの「助けと奉仕」が無かったなら、信仰の第一歩すら踏み出すことができなかったのではないのでしょうか。したがって、パウロはまことの主なる神のからだなる教会、即ち「信じる者の集い」がいかに大切なものであるかを本当によく分かったのです。

パウロは自分が洗礼を受けた日から、「自分はただ単に、主のからだなる教会の一つの部分に過ぎない」、「イエス様こそ、ご自分の教会のかしら、支配者であり、導き手である」ということを悟ったのです。パウロは主のからだである全世界の教会を見たとき、「自分は主を見た」という誇りはどこかに消えてしまいました。「自分がいかに小さな存在であるか」を知ることができたからです。

私たちは主に対する知識が大切であることをよく知っていますが、もし、この偉大なる教会を見るに至るなら、また、「イエス様を教会のかしら」として見るなら、私たちの持っている主に対する知識はいかに小さいかを知るに至ります。ローマ書1章11節、12節に、パウロは次のように書いたのです。

ローマ人への手紙 1章11節、12節

**私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。**

「互いに」、「ともに」とパウロは書いたのです。成長のためにお互いの助けがどうしても必要です。もう一度エペソ書に戻りまして、

エペソ人への手紙 3章18節

**すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、**

と書かれています。

このようにパウロは祈りました。とりなして祈ったのです。原語では、理解するようにだけではなく、完全に知るように、と書かれています。主を完全に知りたいと願わないでしょうか。私たちは、「少ししか持っていない主を知る知識」で満足していて良いのでしょうか。それとも、もっともっとイエス様を完全に知りたいのでしょうか。

私たちは、四、五年信仰生活を送っているうちに、「既に主を知り得た」かのように考えてしまいます。パウロは、「今ようやく主を知り始めた」と言います。前に読みましたピリピ書3章12節です。

ピリピ人への手紙 3章12節

**私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。**

主を完全に知りたい。これが私たちの目ざす目的でなければなりません。エペソ書1章23節は、本当に大切な箇所です。

エペソ人への手紙 1章23節

**教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**

もちろん、建物ではありません。団体でもありません。ある組織でもありません。この節には、「全き主イエス様」について書いてあります。「すべてのものをすべてのものの内に満たしておられる完全なる主」の御姿が描かれています。イエス様は、すべての内にご自身の体なる教会に満ちようとされ、それを満たそうと願っておられるお方です。教会は「イエス様の満たし」です。

イエス様を完全に知るには、他の信者ととともにする生活が本当に大切です。ですから、パウロはエペソ書3章18節で強調したのです。即ち、「すべての聖徒とともに」と。

このイエス様を完全に知るには、他の信者ととともにする生活が大切です。すべての聖徒とともに出なければ、主は本当の意味で用いられないのです。

私たち主イエス様の恵みによって救われた一人一人が、もっとイエス様を知りたいと願っていることは確かです。けれど、一人ではそれがどうしてもできないということもよく知っているでしょうか。あなたは自分一人で主を知りたく願っていますか。もしそうなら、あなたは一人で何とかしようともがいていることになり、まことの心の成長を遂げること



ができない結果になるでしょう。もちろんこう言い切っては、誤解を招くかもしれません。個人的に主は導き、霊性を高めてくださいます。一人で聖書を読み、静かに黙想する時も本当に大切です。けれど、その時他の兄弟姉妹にも考えが及ばなければならないということです。

主は「一人一人をご覧になる」とともに、「からだなる教会」を見ておられます。私たちが救われた兄弟姉妹の群れはもっと、ともに主を知り、ともに祝福にあずかることができるように祈りたいものです。

私たちは、主を知れば知るほど、主についてほとんど知っていないということを告白せざるを得ません。もし、おのれの成長、進歩だけを考え、他の兄弟姉妹に考えが及ばないなら、既に自分は得ているという自己満足のところに追い込まれてしまいます。他の信者とともにする生活の結果は、主をほんの少ししかまだ知っていないところに私たちを導きます。イエス様の大切な呼びかけは、マタイ伝 11 章 29 節です。

マタイの福音書 11 章 29 節

**「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」**

と約束しておられます。そしてパウロは、

エペソ人への手紙 4 章 2 節

**謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、**

と言っています。

このことを考えてみると、「主を知ることと、謙遜、また柔和」には深い関係があることを知ります。けれど、私たちは他の信者との交わりなくして、「柔和と謙遜をもち給う主イエス様」を知ることができないのではないのでしょうか。もしあなたがひとりぼっちで生活するなら、「柔和と謙遜」の尺度がなくなります。私たちは何と高ぶった者でしょう。私たちは心の底から高ぶる者であり、驕れる者です。謙遜そうに見える人は往々にして高ぶる人です。

それではいったいどうしたら謙遜になれるのでしょうか。傲慢を治す薬があるのでしょうか。あります。それは「信者とともにする生活」です。けれど、集会に来て、隣に座ってお話を聞く、それは、他の信者とともにする生活ではありません。ともにする生活とは、「信者お互いがその喜びと悲しみをともにする生活」を言います。また「同じ目的を旨ざす生活」を言います。救われた兄弟姉妹の群れは、お互いに霊的成長の場所、証しの場所、ともに戦う場所、また「ともに満たされる場所」であるべきです。もしそれが心から分かれば、本当に幸いです。

これは具体的な現われとして、自分の興味、自分の願い、自分の目的を否定することを意味しています。これは、言うことは簡単です。しかし、実際になると自分が頭をもたげ、またもや不幸になってしまうといった具合に、なかなか難しいことです。自分の生まれながらの性質、古き人、自分の考え、自分の目的、これらは信者の交わりにとって邪魔です。逆に信者の交わりは、これら古き性質、自分の考えや目的にとって恐るべきものです。天においでになるイエス様を知ること、地上にいる兄弟姉妹の内に宿っておられるイエス様を知ることが、全く同じことです。

各々の兄弟姉妹の内に、イエス様を見ているのでしょうか。あなたは他の兄弟姉妹とともに、「主イエス様をよりよく知ろう」としているのでしょうか。遠く離れていて愛することは極めて簡単でしょう。しかし、ともに生活して、相愛することは極めて難しいことです。何か自分が役割を演じたいというような古い性質は、全く打ち砕かれなければいけません。そうなるためには、信者とともにある生活が大切です。

私たちは今、イエス様を追い求め始めました。パウロでさえ  
ピリピ人への手紙 3章12節

**私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。**

と語っています。

最後の結果はどのようになるでしょう。それは、エペソ書3章21節にあるように、  
エペソ人への手紙 3章21節

**教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。**

ということになります。

私たち一人一人にではなく、「イエス様にご栄光があるように」。主の御目からご覧になると、からだなる教会は、あの信者、この信者という複数ではないのです。ただ一つの人格、イエス様御一方です。イエス様だけが、父のみこころにかなうお方であり、私たちはイエス様のからだの一部としてのみ、主のみこころにかなう者となることができるわけです。

旧約聖書を見ると、聖なる神がその宮に満ちたとき、そこにとどまり得た人間は一人もいなかったのです。みんな宮から離れ、逃げ去らなければいけませんでした。もし聖霊の宮で、即ち兄弟姉妹の群れで何か役割を演じようと試みるなら、その人は動きが取れなくなってしまいます。

「まことの教会」は、多くの人々ではなく、「ただひとりの御方イエス様ご自身」であり、

私たちはその肢体の一部に過ぎません。まことの教会におけるご奉仕も、これと全く同じです。イエス様は信者たちの絶対的な支配者であられます。ですから、イエス様が人を伝道者とし、或いは面倒をみる者、ともに悩む者、イエス様だけを示す者たちをお立てになるのです。なぜある人は福音を公に宣べ伝える者となり、別の人は日曜学校でイエス様のことを話すのでしょうか。それは神学校を卒業したからでしょうか。また生まれながらにして能力があるからでしょうか。決してそうではありません。イエス様によって捕えられた主のしもべ、また「自分の全き無能力」を深く知り、「日々御霊に導かれる人」がそれです。「自分が全く駄目な破産者」であり、「おのれの動機と考えを憎むこと」を心から知り、「信者の交わりの内に自分が見えなくなる」ことを、そして「栄光が主にのみ帰せられることを喜ぶ」ことのできる人は本当に幸いです。主がご自身の栄光のために私たちをそこにまで導いてくだされば本当に幸いです。

もう一度、マタイ伝 11章 29節、そしてもう一箇所お読みしたいと思います。人間には決して言えないことばです。イエス様は、

マタイの福音書 11章 29節、30節

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

と。

ペテロの手紙・第一 5章 5節から 11節

同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。身を憤み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

とペテロは、当時の迫害された信者たちに書き送ったのです。

了